
東方異聞録 日常と非日常の狭間

紅い月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方異聞録 日常と非日常の狭間

【Nコード】

N6125F

【作者名】

紅い月

【あらすじ】

満月の夜、俺はそいつにあった。そいつは自分のことを『妖怪だ』といった。なんでそんな妖怪がここに？俺の前に現れる？オリジナルキャラ+東方のファンタジーここに開演

一の狭間 そこにある日常（前書き）

初めまして作者です。

読まれる前に一つだけ。

私は東方PROJECTのゲームをした事はありません。したがって、東方キャラの設定がかなり曖昧です。なのでそう言うのが嫌な方は戻ってもらった方がいいです。

一の狭間 そこにある日常

夜空に浮かぶ満月。そう、今日みたいな日だった

彼女とであったのは

「あんたは……一体、何者なんだ？」

「私？私は紫。八雲 紫。妖怪よ」

都立閨秀学院。

都内にあるごくごく普通の高校。

特徴の無いのが特徴と言える平凡の学校。

しいて言えば、今は絶滅危機に陥ってる『番長』がいることくらいだろうか？

特につるんでなにかやらかす事も無く、日がな一日屋上で寝ていて、気が向いたら授業に出る。そんな感じの奴、それが俺、『酒鬼一馬』だ。

キーンコーン、カーンコーン

授業の終わりの鐘が鳴った。

「ふわああああ・・・昼か〜」

腹も減ったし売店にでも行って昼飯買うか・・・

「あゝ。まゝたこんな所に・・・カズ君、いい加減にしないとホントに留年するよ〜?」

うるさいのが来たな。

「里香しかいい加減俺に付きまとうの止めるよな〜。他の連中に変な目で見られるぜ?」

こいつの名前は、『安藤 里香』。子供の頃から隣通しと言う腐れ縁だ。その為か他の連中は寄りもしない俺に話しかけてくる奇特な奴。10年くらい一緒にいたがあんまり変ってない様に思える。幼い顔立ちと、小さな身長で『お前、ホントに高校生?』と思っつまうくらいだ。

未だにバスなどの料金を払うときに「子供は半額だよ」などといわれてしまうくらいだ。

「うつせーな。解ってるよ。大体、成績なら俺の方が上じゃねーか。勉強教えてるのもいっつも俺だし」

「うつ。だ、だからこうしてお弁当持ってきてるんだよ?」

手には、自分用か、小さな包みと他に、大きな包みが一つ載っていた。

「・・・ま、いつか」

そして、包みを受け取りたわいも無い話をしながら弁当を食べ、昼寝をする。

夕方になったら。里香が迎えに来て一緒に帰る。

なんの変哲の無い日常。

これからも続くと何気なく思っていた日常。

だが・・・

それは突如として終焉を迎えた。

まだ、夏の日差しが残った暑い夕方。いつものように二人で歩いていた。

「あ、ねえねえカズ君。お願いがあるんだけど」

里香の家の前に着いたら少し恥ずかしそうに話しかけてきた。

こいつ、二人だけのときはこんな言い方しやがる。面倒だから聞き流すが

「なんだよ?」

「今度の日曜日暇かな?お買い物付いてきて欲しいんだけど……ダメかな?」

こいつとの身長差、結構あって下から潤ませて見られると。何故か逆らえない……べ、別に気になってる訳じゃねえぞ

「あゝ。まあ、暇だし。いいぜ、付き合ってやる」

顔を見ないように答える。……顔、赤くなってるの見られたくないし。

「じゃあね〜。また明日」

「おう、明日な」

こうしていつも通りの別れを済まし、俺も自分の家に帰って行った。

そして日曜日。

「ん〜、こつちが良いかな〜？あ〜いや、あつちかな？」

ふらふら、ふらふら

良く飽きないね〜。かれこれ一時間以上ここに居るよ。女ってのは時間を忘れて買い物出来て良いな。

「あ、ゴメンねカズ君、もうちょっとだから・・・」

「それ、30分前に聞いたぞ・・・」

「・・・」

「・・・」

共に無言。

「ん〜、こつちが良いかな〜？あ〜いや、あつちかな〜？」

・・・かれも、日曜。

近くのベンチで座って待ってる事にするか・・・

「ふう、後、何時間掛かる事か」

何気なく、周りを見てると

「ん？なんだ？あれ」

壁の無い所に裂け目？

近づいて覗き込もうとすると、いきなり首根っこをつかまれ後ろに引きずられた。何とか踏みとどまり倒れることはしなかった。

「つて〜。テメエ、何しやがる」

そして、相手を見て次の言葉が出なかった

「……………」

何で、巫女がここに居るんだ？しかしかなりアレンジした巫女服だな。腋見せまくりか、もうちょっとで……………」

「だめよ……………」

「あ？」

謎巫女（仮）は裂け目を見ながら話した。

「あれはこちらの世界の住人が関わってはいけない者」

「何を……………」

「カズク〜ンお待ちせ〜」

里香がこっちに来た。俺はそっちの方を向き、また謎巫女の方を見ると

「あれ？」

居なくなっていた。

「なあ、里香？さっきここに変な巫女服着た女居なかったか？」

「ん〜？居なかったよ」

まあ、いいか。とりあえず終わったらしいから飯でも食って帰ろう

「あ、新しいアクセサリ屋さんだ。カズ君ゴメンねもうちょっと待ってて」

そう言うが早いかすっ飛んで行きやがった。

この後、更に2時間ほど待たされたが・・・まあ、これも日常だ。

それより。待ってる間、俺はさっきの謎巫女が気になって頭から離れなかった。

一の狭間　そこにある日常（後書き）

どうでしたでしょうか？感想お待ちしています

二の狭間 壊れた日常

「で、あるからして……」

俺は、教室の窓側の一番後ろ、いわゆる『不良の特等席』にすわり教師の言葉をBGMにしながら窓の外をぼーっと眺めていた。

『こちら側の住人が関わってはいけない者よ』

(「こちら側って何のことだ？この世界って事？」)

「……君、カズ君」

隣で里香が心配そうに見ていた。

「ん？ああ、どうした？」

「何か心配事でもあったの？ずーっと外見でて」

「いや、何でもねえよ。気にするな。それよりちゃんと授業聞いている。頭悪りいんだからよ」

ちよつとからかってやると子供っぽく頬を膨らませ

「ふんだ、心配してあげてるのに、いいよもつ」

そう言っつて里香は前を見て授業を聞く。

俺もため息と共に考える事を止めた。

「でね。赤星先生つたら・・・」

帰り道、二人で取り留めない話をしながら帰っていた。

「ちょっと、そこのお二人さんいいかしら？」

急に声を掛けられた。

「はい、何でしょう？」

見ると、そこには紫の服を着て、パラソルを持った妙齡の美人だった。

「この辺りに、博霊神社ってあるかしら？」

「博霊神社？ですか」

そんな名前の神社この辺りには無いはずだ

「いえ、無いと思います」

「そう、ありがと」

そう言うと、踵を返して俺達とは反対方向に歩いていった。

「あ、そうそう。その坊や」

呼ばれて、立ち止まる

「あんまり近づいたらダメよ」

「!」

振り向いたときには、

「居ない……」

そこには、陰も形の無くなっていた

「考えすぎだよカズ君」

「そうか？お前が考えなさ過ぎなんだよ」

考えすぎ……そうかもしれない。

だけど、何故かそうは思えなかった。

何かは解らないが不安になってしまっている自分が居た。

その夜、親に言われて買出しに出た。

「ったくよ」。何で飲まない酒のつまみを俺が買いに行かなきゃならんだ……」

愚痴をこぼしつつ近くのコンビニで買い物を済まし帰途に着く。

「・・・・・・・・！！！！」

「ん・・・・？」

路地の裏で誰かが言い合ってるようだ。

（喧嘩か？・・・まあ、いいか）

シカト決め込んでさっさと帰ろう。

そう思った時

Gooooooooo！！

物凄い、大きな音に襲われた。

「なっ！何だ！？」

路地裏に駆け込むと、そこには

「Gooooooooo！！」

形容しがたい化け物（あえて言うなら熊だろうか？）と夕方の女が対峙していた。

女はこちらを見ずに気づいたのか顔だけ振り向き、道端で会ったかのように気軽に話しかけてきた

「あら、また会ったわね。坊や、危ないからどいておいた方が良く

わよ
「

俺は、混乱して何がどうなっているのかさっぱり解らず呆然と立っていた

「ま、しょうがないわね」

女がこちらに無防備に振り向くと怪物がいきなり襲い掛かってきた。

「止めとけばいいのに・・・」

怪物と、女の間我突然裂け目が現れ、怪物が中に入り込んで行った。

「・・・・・・・・・・」

「安心しなさい。もう大丈夫」

「あんたは・・・・・・・・一体、何者なんだ？」

「私？私は紫。八雲 紫。妖怪よ」

月夜に照らされたその姿は、余りにも美しく、そして・・・・・・・・

二の狭間 壊れた日常（後書き）

こんな作品でも読んでいただけて幸いに思います。

東方の設定が解るサイトとか探してるんですが中々見つからず自分オリジナルの設定とかになりそう。

ファンフィクションじゃなくなるかな？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6125f/>

東方異聞録 日常と非日常の狭間

2010年10月10日15時56分発行